

# 本場の中華料理とは

● 放 眼 日 中



ここ数年、「日本でも本場の中華料理が食べられるんですか」などという質問を頂戴することがある。「本場の中華」とはどんな定義だろうかなどと思いつつ、取りあえず東京であれば池袋などにお連れするようにしている。北口を出た辺りから、日本語より中国語の方が多く聞かれ、中華レストランもかなりの数があり、本格的な味と共に臨場感も味わえるからだ

中国人の友人たちはかなり前、「中華料理と書かれている店は本場ではなく、むしろ日本料理の一つだ」と言っていた。ラーメンやチャーハン中心の中華食堂、かた焼きそばにエビチリなど、中国にはもともとないメニューがあれば、もうそれは立派な日本料理だ。ただ、最近では「中国料理」と名乗る店も急増しており、「本場」は区別されているようだ。

池袋の店に入ると、その多くで店員が中国語を話し、メニューも中国語で書かれていた。まるでそこは日本ではないと錯覚するほど、中国のどこかの街の食堂のようだった。実際に全く中国を知らない日本人と一緒にいくと、最初は見慣れない東北料理などに恐る恐る手を出す、食べるに意外にうまいと言う。

だが、頼むお酒は「日本のおじさんの定番」である紹興酒。しかし、北方の食べ物には白酒の方が合うと何度か勧めると、ちよつと飲んでみて、これはいいと杯を重ねる。そして「なるほど、これが本場の中華か」となる。

実は、中国には中華料理という言葉はない。中国各地で料理は異なり、四川、上海、広東など地名で呼ばれており、一般的な日本人は上海から南の料理に比較的慣れているという

ことだろう。

最近筆者は「本場の中華」を出す店の見分け方として、「予約の電話を入れて店員が中国語で出ること」を独自に挙げるようになってきた。

それはその店が「日本人客を想定していない」ことを意味しており、対象顧客は中国人になるからだ。先日訪ねた埼玉・西川口。こちらもチャイナタウン化がいわれているが、われわれの入った店の客はすべて中国人であり、店員も当然のように中国語のみを使っていた。

以前富山県に行った時、「本場のパキスタン料理を食べませんか」と言われてのけ反った思いがある。なぜ富山でパキスタンなのかと思つたが、そこにはパキスタンに中古車を輸出するディーラーが多く、そのパキスタン人が自国の食べ物を求めて簡易なプレハブで食事を提供して

いたのだ。まあ、社員食堂のようなイメージだったかと思う。

それが周囲の日本人に知れ渡り、われわれが行った時にはすでに客は日本人ばかりとなり、料理も多少日本人的になっていった。恐らくパキスタン人は「これは商売になる」と踏んで社員食堂の料理を少し変え、料金を値上げして日本人向けに提供し、自らの食堂はまた別の場所にこつそり造り、そこでは安く提供しているのだろうと想像した。

池袋でも西川口でも、恐らく富山のような状況が起こっているのではないかと勝手に推測している。本場の本場の中華は、きつと街の奥深い所に潜行しているが、そこを探し当てるのは容易ではないし、そこまでの食通ではないので、これ以上の詮索はしないつもりだ。



コラムニスト・アジアソウオッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。